九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

九大フィルハーモニー会と陶晶孫

幸島, 光義
九州大学文学部 : 卒業生

https://doi.org/10.15017/1462145

出版情報：中国文学論集. 42, pp.111-124, 2013-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

九大フィルハーモニー会と陶晶孫

幸島光義

一　はじめに

陶晶孫（一八九七―一九五二）、本名・陶熾は、中国無錫に生まれ、一九〇六年（明治三十九年）父に従って来日する。東京神田の錦華小学校へ入学、東京府立第一中学校、第一高等学校特設予科、第一高等学校本科を経て、九州帝国大学医科、次いで東北帝国大学理学部へと進学した。九州帝国大学在学中に郁達夫や張資平、郭沫若らと共に創造社に参加し、『木犀』、戯曲『黒衣人』を発表した。陶の生涯の特徴として、文学を本職とせずあくまで専攻の医学の道へ進んだこと、幼少期からピアノを愛し、九州帝国大学在学中、九大フィルハーモニー会（以下九大フィル）に参加し音楽活動も行っていたという点が挙げられる。陶晶孫については、八〇年代以降の中国近現代文学研究において、中国における新感覚派の先駆者として位置づけられてきた。それらの研究の多くは陶を文学家として再評価するもの、及び日本への留学生として日中の狭間に立たされた苦悩について言及するものである。また、陶晶孫の九州帝国大学在学中の福岡滞在期についても言及されてきたが、九大在学中に発表された『木犀』における福岡に対する酷評[1]をもとに、総じて福岡滞在期は暗鬱としたものであったと論じられている[2]。また、福岡滞在期に九州帝国大学の管弦楽団であった九大フィルに参加していたという点については、多少の言及は見えるものの、本格的な資料の調査などによる裏付けは行われてこなかった。本論文では陶の九大フィルへの参加に注目し、九大フィルに残される資料を紐解き、陶の福岡滞在について再検討を行いたい。

二　陶晶孫と音楽

陶晶孫と音楽との繋がりについては、これまでの研究においてもたびたび言及されてきた。福岡時代には曲譜『湘纍的歌六曲』を発表し、東北に移った後も『音楽会小曲』など、音楽に関連した作品を発表している。また、陶の作品には、「Debussy」や「Chopin」などの作曲家をはじめ、クラシック音楽が度々登場する。私生活においても、東北帝国大学においては発足したばかりの東北大学交響楽団の指揮者としてモーツァルトの交響曲第四〇番を指揮し、ピアニストとして独奏も行った[3]。また台湾へ移った後も、台湾大学でコントラバス、晩年千葉に移った後には市民楽団の一員[4]として生涯にわたって音楽との繋がりを持ち続けた。陶にとっての音楽は、単なる趣味という枠を超え、陶を語る上で欠かせない要素となっている。厳安生氏によると、陶が音楽に初めて触れたのは、幼少時の母の指導においてである[5]。しかし、陶が生涯にわたって音楽との繋がりを持ち続けた大きな契機となったものとして、筆者は九州帝国大学時代に在籍した、九大フィルとの関わりを考えたい。陶自身も『晶孫自伝[6]』において以下のように述べている。

> 高等學校三年，入福岡九州帝大，…中略…入某教授組織之大學管弦樂，擔任大提琴，同時很努力彈鋼琴，夏天穿騎馬的長靴彈琴，以防蚊子。這个管弦樂爲當地的音樂最高把握機關，所以從此很知道日本中央音樂界的事體。
>
> 第一高等学校の三年の後、福岡の九州帝国大学に入学した。…中略…　或る教授の組織する大学オーケストラに入り、コントラバスを担当した。同時にピアノの演奏もとても努力し、夏は乗馬用のブーツを履いてピアノを弾き、蚊にさされないようにした。このオーケストラは九州における音楽の最高レベルの機関であり、日本の中央音楽界のこともよく知ることができた。

このように、陶自身九大フィルに対して、「音楽の九州最高レベルの機関」と評価しており、この団体での音楽活動が充実していたことを示している。しかしながら、九大フィルでの陶の具体的な活動は多くを語られてはいない。この点に関しては、当の九大フィルがアマチュアーの楽団であり、その歴史や存在が広く周知されていないこと、

また九大フィル自体、陶晶孫が在籍していた事実を長い間知らなかったということが原因であると考える。

三　九大フィルハーモニー会とは

九大フィルハーモニー会（現・九大フィルハーモニー・オーケストラ）は、九州帝国大学の前身である京都帝国大学福岡医科大学において精神病学教室初代教授、榊保三郎氏によって一九〇九年に設立された。工学部・荒川文六教授（第六代九州大学総長）、工学部・降矢芳郎教授も参加し、当初は会員（教授、学生）による音楽活動・発表活動の他、外国人音楽家来日演奏会の主催などを行った。[7] 陶が在籍した当時、全国的に見ても二管編成[8]を擁する常駐管弦楽団として東京に勝るとも劣らない環境を整えていた。『九大フィルハーモニー・オーケストラ五〇年史』には、大正期の九大フィルについて以下のように述べている。[9]

大正8年以降、数年間は九大フィルハーモニー・オーケストラの最も華やかな一時期といえよう。堂々たる二管編成のオーケストラはアマチュアーのオーケストラとしては唯一のものだったからである。一五回以降、定期演奏会には必ず交響曲が演奏された。すなわち

大正八年（一九一九年）　第一五回　ベートーベン、第一交響曲
大正九年（一九二〇年）　第一六回　シューベルト、第八交響曲（未完成）
同　　第一七回　ベートーベン、第六交響曲（田園）
大正一〇年（一九二一年）第一八回　モーツアルト、交響曲第四〇番
同　　第一九回　ベートーベン、第五交響曲
大正一一年（一九二二年）第二〇回　メンデルスゾーン、第四交響曲

このような交響曲は東京でも当時はなかなか聴くことのできなかった大曲であり、筑紫路の一角で、このような文化の香り高い音楽会が定期的に開かれていたことは日本の洋楽史上特筆されてよいことである。

また、創立者の榊は東京帝国大学医科大学を卒業の後、文部省留学生としてドイツに渡る。ドイツ滞在中は研究

の傍らヴァイオリンをヨーゼフ・ヨアヒムの弟子であるシルク女史に師事していたとされ、ヴァイオリンの名手でもあった。帰国後、京都帝国大学福岡医科大学に赴任すると、研究のみならず音楽活動もはじめた。榊は私財を投じ、当時東京でも手に入れる事の出来なかった楽器・楽譜をドイツから取り寄せる。これらの楽譜は、学生時代の近衛秀麿[10]が東京から写譜をしに来るほどであった。[11]一般的に日本のオーケストラ活動の開祖と言われた山田耕筰（一八八六―一九六五）、近衛秀麿（一八九八―一九七三）は、榊のそれぞれ十六歳、二十八歳年下である。したがって、日本において本格的なオーケストラ活動が始まるよりも前に、東京から遠く離れた福岡の地で九大フィルが活動していたことがわかる。管弦楽団の設立を中心とした当時の国内音楽事情については、本稿末に挙げる略年表を参照されたい。

四　九大フィルハーモニー会と陶晶孫

記録によると陶が九大フィルに参加していたのは一九二〇年から一九二二年の三年間であり、前節の記述から見るに九大フィルの全盛期と重なる。当時の九大フィルは『晶孫自伝』に見られるように「音楽の最高レベルの機関」として活動を行っていた。そのような団体の中で、陶はどのような活動をしていたのだろうか。『九大フィルハーモニー・オーケストラ五〇年史』より、陶晶孫（陶君、陶熾君）の名前が見られる演奏会を次にあげる。

◆第一六回春季演奏大会
◆第一八回春季演奏大会
◆第二一回秋季演奏大会　管絃楽の夕
※第一六回は二番トロンボーン、第一七、一八回は二番コルネット、第二〇、二一回はコントラバス担当で参加している。
◆ベートホーフエン一五〇年祭紀念第一七回春（ママ）（秋）季演奏大会
◆第二〇回春季演奏大会　メンデルスゾーンの夕

陶はこれらの演奏会で、ベートーヴェンやチャイコフスキー、メンデルスゾーンといった名だたる作曲家の管弦楽曲を演奏し、ショパンやドビュッシーの室内楽も耳にしていたと考えられる。また、九州帝国大学在学中の演奏

会の内、第一九回を除いて全ての演奏会に出演している。（図版①の写真にはコントラバスを抱えた陶晶孫が写っている。）先行研究で述べられてきたチェロ演奏のみならず、コルネットやトロンボーン、コントラバスといった楽器も経験している。これらの事実は、自伝においても語られていない。このように、陶は九大フィルにおいて非常に充実した音楽活動を送っている。また、当時の音楽事情に鑑みても福岡は、音楽面において東京と遜色ない環境であったと考えられる。しかし、このような福岡での音楽面での充実は、『木犀』などの小説では語られていない。また一方で、自伝においては九大フィルを「音楽の九州最高レベルの機関」と評するなど、小説と自伝の間に隔たりがあり、文芸活動に見える福岡と音楽活動に見える福岡は反対の印象を与えている。

五　九大フィルハーモニー・オーケストラに遺る陶晶孫

筆者は、九大フィルに残る草創期の資料[12]の中から、陶晶孫に関連する資料の調査を行った。ここではその結果を報告したい。なお、以下の図については筆者が撮影を行い、図中に適宜目印を附した。九大フィルに現存するパンフレットのうち、陶晶孫（陶君、陶熾君）の名前が確認できるものは以下の四冊である。

◆第拾六回春季演奏會曲目説明書（図版②、図版③）
◆ベートホーフエン百五十年祭記念　第拾七回秋季演奏大會曲目説明書（図版④）
◆第弐拾回春季演奏大會　メンデルスゾーンの夕（図版⑤）
◆第廿一回秋季演奏大會　管絃樂の夕（図版⑥）

以上の演奏会の他にも、陶晶孫の出演が記録されているが、パンフレットは現存せず、『九大フィルハーモニー・オーケストラ五〇年史』にその記録が残るのみである。[13]

以上の資料より、先行研究ではチェロないしコントラバスを演奏していたと考えられてきたが、実際にはそのほかにコルネットやトロンボーンも演奏していたことがわかる。なぜ陶がこれらの楽器について記述しなかったかについては不詳であるが、陶の作品や自伝からは読み取ることのできない体験のひとつであろう。また、後に発表し

た『音楽会小曲』に現れる「Debussy」や、作品に度々登場する「Chopin」などの作曲家の音楽について、この九大フィルの演奏会で実際に耳にしていたと考えられる。

次に、九大フィルの所有する楽譜について考えたい。九州大学大学文書館に所蔵されている楽譜群のうち、前掲のパンフレット及び『九大フィルハーモニー・オーケストラ五〇年史』より、陶晶孫が九大フィルに在籍し演奏会で演奏した曲目のうち、現存が確認されたものが以下である。（括弧内は九大フィルでの演奏年）

◆交響曲第七番未完成　シューベルト　（一九二〇）
◆「アテネの廃墟」序曲　ベートーヴェン　（一九二〇）
◆交響曲第四番「イタリア」　メンデルスゾーン（一九二二）
◆静かな海と楽しい航海　メンデルスゾーン（一九二二）
◆「くるみ割り人形」組曲　チャイコフスキー（一九二二）

残念なことに、これらの楽譜の購入年および写譜年などの記録は残っておらず、未整理のままである。そのため、これらの楽譜が実際に大正期に使用されたかどうかは定かではない。特にメンデルスゾーンやシューベルトの曲目は、戦前戦後を通して複数回演奏された記録が残っており、いつ購入または写譜されたかを特定することは非常に困難である。しかしながら、演奏会記録の調査を進めてゆくと、ベートーヴェン作曲の「アテネの廃墟」序曲に関しては、以下のような事実が分かった。

① 九大フィルでは一九〇九年の創立から現在まで、一九二〇年の第一七回演奏会の一度しか取り上げていない。

② 定期演奏会以外の記録においても演奏された記録がない。

以上のことより、「アテネの廃墟」序曲の楽譜は、実際に一九二〇年の演奏会で使用されたものである可能性が非常に高いことがわかる。この演奏会において陶はコルネットを演奏しているため、「Cornet」と記載のある楽譜を挙げる。（図版⑦、図版⑧）記録によるとコルネットを演奏したのは、井上学士、陶君の二人である。実際に楽譜を調査してみると、現在出版されている楽譜とは大きく内容が違う（図版参照）。これは現在と違い、当時は出版社や指揮者による改変が許容されていた事、人数の不足や演奏技術不足により他の楽器に楽譜を移すなどの処置が見られ

た事に起因すると考えられる。陶自身が写譜を行った可能性を含めて、今後の調査に期待したい。

六　おわりに

これまで述べたように陶は、福岡において充実した音楽生活を送っている。ピアノ以外の楽器は九大フィルで始めた楽器であり、演奏会に向けた練習は熱心なものであったと考えられる（図版⑨、⑩）。特に、陶が初めてコントラバスを担当した際に演奏しているメンデルスゾーンの楽曲は、今日においても難易度の高い楽曲として知られているため、演奏会に向けた練習もより熱の籠ったものだったと考えられる。加えて福岡の音楽面における環境は東京と遜色ないものであり、『木犀』に描かれた福岡とは大きく異なる。これまで注目されることのなかった福岡での音楽活動を考えると、自伝的小説における福岡の描写を以て陶の生活を同様に論じることは出来ず、陶の福岡滞在は先行研究で述べられてきたような暗鬱で不遇なだけではないということが分かる。先行研究のように『木犀』の主人公を陶の完全なる自画像として捉えることはできないのである。事実として陶は、音楽面での充実からわかるように多少なりとも学生生活を謳歌していた。陶が参加していた九大フィルは、今もなお熱心に音楽活動が続けられており、演奏に打ち込むその姿は創立百年を超えた現在でも脈々と受け継がれている。

陶は九州帝国大学を卒業後、東北帝国大学へと進学する。この地においても文芸活動のみならず、音楽活動も続け東北帝国大学交響楽団の礎を築いた。東北の地での音楽活動について『晶孫自伝』においても「規模は九大程ではなかったが、大いに勉強になった。」と述べており[14]、大学卒業後も、医科業の傍ら、晩年まで演奏活動をおこなった。陶が使用したチェロは三男の易王氏に受け継がれ、現在でもその音色を響かせている。

以上の事から、陶の福岡滞在は従来語られてきたような暗鬱なものではなく、陶の人生において重要な位置を占める音楽と出会い、その後の文学にも影響を与えたものであった。

陶の在籍した時代の九大フィルの活動は当時において非常に先進的であり、陶が九州帝国大学を卒業した翌年には、ベートーヴェンの交響曲第九番「合唱付き」第四楽章の日本人初演を行うなど、様々な偉業を達成した。陶が

在籍した四年の間にも、日本初演とされるメンデルスゾーン作曲の交響曲第4番「イタリア」を取り上げており、陶は九大フィル参加により、日本の西洋音楽の発展を肌で感じていたのである。

非常に残念なことに、九大フィル草創期の楽譜群はその多くが未整理のままである。また、その楽譜がいつ購入され、どのように使用されたかという点については未だ詳細が不明な点ばかりであり、その全容を把握することが出来ない。整理・調査を通して、さらに陶晶孫に関する資料が発見されることも考えられ、福岡での実生活を知る貴重な資料となりうるため、今後の整理および調査が望まれる。

注

（1）『木犀』において福岡を「郷則大俗，市則冷落了。」と評する。また、福岡での生活を「馬車馬的生活。」とも評している。

（2）岩佐昌暲編著『中国現代文学と九州』所収（KUARO叢書　九州大学出版会　二〇〇五年）小崎太一「陶晶孫と福岡」などを参照。

（3）東北大学交響楽団同窓会編『東北大学交響楽団史』（同会　一九八九年）三三頁　また、同書によると東北大学交響楽団の最初の指揮者は陶であり、モーツァルト作曲交響曲第四〇番などを指揮している。

（4）九大フィルハーモニー会編『九大フィルハーモニー・オーケストラ一〇〇年史』所収（同会　二〇〇九年）松村晶「大学オーケストラ人でもあった陶晶孫」を参照。また齊藤孝治『シュトゥルム　ウント　ドランク〈上〉』（シュトゥルム・ウント・ドランク編集出版委員会　二〇〇五年）にも言及が見える。

（5）厳安生著『陶晶孫　その数奇な運命』（岩波書店　二〇〇九年）。

（6）『晶孫自伝』（丁景唐編『陶晶孫選集』所収　人民文学出版社　一九九五年）。

（7）九大フィルハーモニー会編『九大フィルハーモニー・オーケストラ五〇年史』（同会　一九六三年）。

（8）管弦楽団の規模を表す。管楽器がそれぞれ二名ずつの奏者を擁する形態。

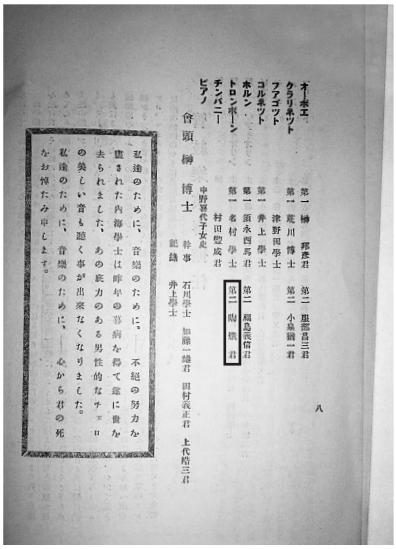
(9) 前掲『九大フィルハーモニーオーケストラ五〇年史』一五五頁。
(10) 近衛文麿の異母弟。一九二六年、新交響楽団を設立し、日本のオーケストラのパイオニアと呼ばれた。
(11) 高仁淑「帝国大学におけるオーケストラ育成運動」――榊保三郎の九州帝国大学フィルハーモニー会活動を中心に――」(九州大学大学院教育学研究紀要　第六号（通算第四九号）二〇〇三年）に詳しい。
(12) 九州大学文書館所蔵。
(13) この他、第一八回春季演奏大会にも出演している。
(14) 『晶孫自伝』(丁景唐編『陶晶孫選集』所収　人民文学出版社　一九九五年)。

＊本論文は、九州大学大学文書館・折田悦郎先生、九大フィルハーモニー・オーケストラ顧問・松村晶先生をはじめ、九大フィルハーモニー・オーケストラ現役諸君に数多くの資料・助言をいただきました。この場を借りて心より御礼申し上げます。

〔略年表〕管弦楽団設立を中心とした当時の国内音楽事情

年	東京の音楽事情	東京以外の音楽事情	
一八八一年	文部省音楽取調掛による日本初の管弦楽演奏。		
一八八九年	文部省音楽取調掛による日本初の交響曲演奏。		
一八九四年			日清戦争勃発
一九〇一年	慶應ワグネル・ソサィエティー設立。		
一九〇四年			日露戦争勃発
一九〇九年		**九大フィルハーモニー会設立。**	
一九一一年	いとう呉服店音楽隊（現・東京フィルハーモニー交響楽団）設立。		
一九一三年	早稲田大学交響楽団設立。		
一九一四年			第一次世界大戦勃発
一九一五年	山田耕筰が東京フィルハーモニー会を設立。	（大阪）羽衣管弦楽団設立。	
一九一六年		京都帝国大学音楽部交響楽団設立。	
一九一八年		（徳島）板東俘虜収容所にてベートーヴェンの交響曲第九番の日本初演。	第一次世界大戦終結
一九一九年		久留米俘虜収容所のメンバーが久留米女学校にて演奏。	
一九二〇年	東京帝国大学音楽部管弦楽団設立。		
一九二一年		東北帝国大学交響楽団設立。	
一九二六年	新交響楽団（現・ＮＨＫ交響楽団）設立。		

図版①　第21回定期演奏会での写真（九大フィル所蔵）。陶は舞台奥中央でコントラバスを左手に抱えている。（矢印部分）

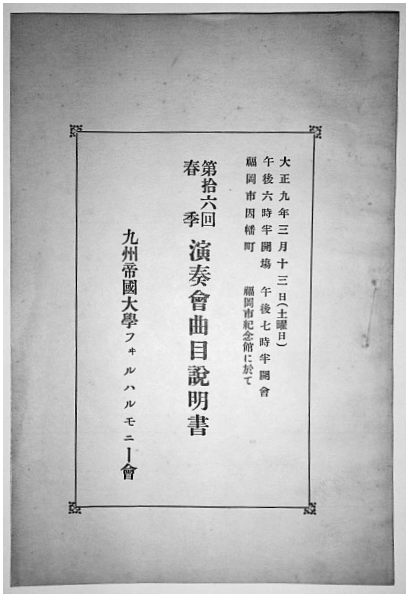


オーボエ　第一　榊　邦彦君　第二　里部昌三君
クラリネット　第一　荒川博士　第二　小泉猶一君
ファゴット　津野田學士
コルネット　第一　井上學士
ホルン　第一　須永西馬君　第二　福島義信君
トロンボーン　第一　名村學士　第二　陶熾君
チンバニー　村田豊成君
ピアノ　中野喜代子女史
會頭　榊　博士　幹事　石川學士　加藤一雄君　田村義正君　上代陪三君
紀錄　井上學士

八

私達のために、音樂のために、不絶の努力を盡された内海學士は昨年の暮病を得て遂に世を去られました、あの底力のある男性的なチェロの美しい音も遠く事が出來なくなりました。私達のために、音樂のために、心から君の死をお悼たみ申します。

図版③　第16回春季演奏会パンフレットより演奏者名簿（九大文書館所蔵）。四角内に陶熾君とあり、実際に演奏者として参加していたことがわかる。他の演奏会にも同様に演奏者名簿が掲載されている。

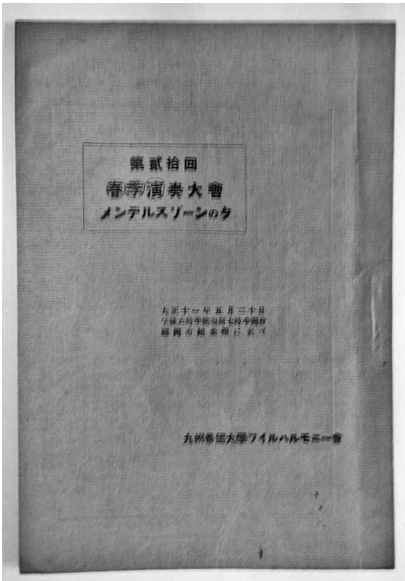


大正九年三月十三日（土曜日）
午後六時半開場　午後七時半開會
福岡市因幡町　福岡市紀念館に於て

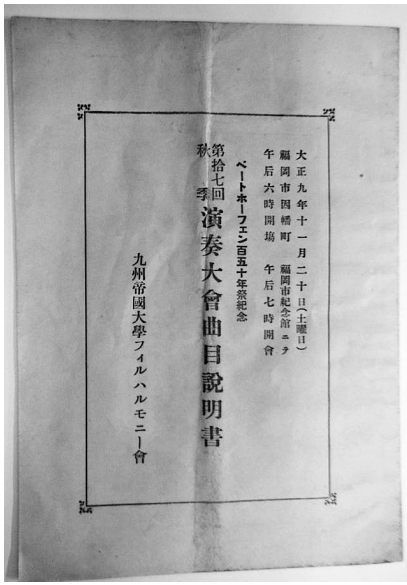
第拾六回
春季
演奏會曲目說明書

九州帝國大學フヰルハルモニー會

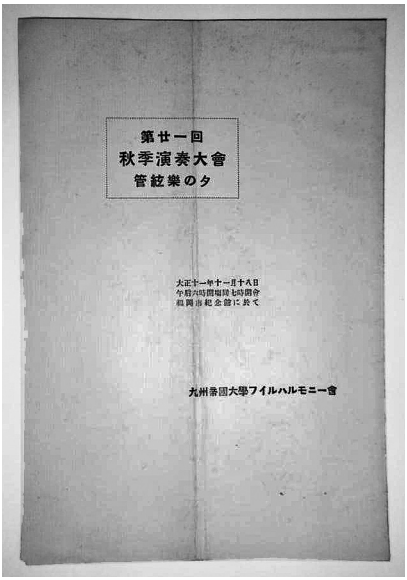
図版②　第16回春季演奏会のパンフレット表紙（九大文書館所蔵）。この演奏会で陶は第二トロンボーンを担当しており、シューベルト作曲の交響曲第７番未完成、メンデルスゾーン作曲の「静かな海と楽しい航海」序曲などの演奏に参加したと考えられる。



図版⑤



図版④

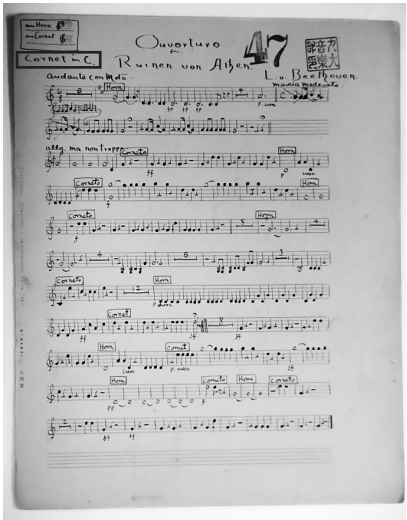


図版⑥

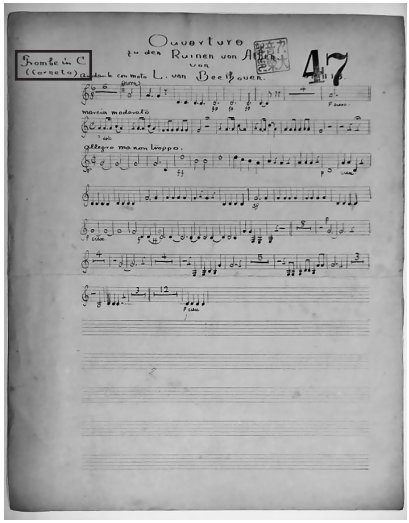
右上：図版④　第17回秋季演奏大会パンフレット（九大文書館所蔵）。陶は第二コルネットを担当し、ベートーヴェン作曲「アテネの廃墟」序曲、交響曲第６番「田園」に参加している。

左上：図版⑤　第20回春季演奏大会パンフレット（九大文書館所蔵）。陶はコントラバスを担当し、メンデルスゾーン作曲交響曲第４番「イタリア」、「静かな海と楽しい航海」序曲に参加している。

左下：図版⑥　第21回秋季演奏大会パンフレット（九大文書館所蔵）。第20回と同じくコントラバスを担当し、ベートーヴェン交響曲第６番「田園」、メンデルスゾーン作曲「結婚行進曲」に参加している。



図版⑧



図版⑦

図版⑦には左上（四角内）に Trombe in C (Corneto) と記載されており、図版⑧には左上に Conret in C と記載されている。ドイツの楽譜出版社 Breitkopf & Härtel 社の『Die Ruinen von Athen Overture』の楽譜と比較したところ、図版⑦に書かれた音符はコルネットではなくホルンの楽譜と一致する。しかし、コルネットで演奏できるよう移調されている。また、図版⑧はコルネットとホルンの両方の音符を書いている。こちらもホルンの音符は移調されている。どちらの楽譜も同一人物によって写譜されており、陶の手によるものと考えられる（九大文書館所蔵）。

図版⑨　当時の九大フィルの練習施設である九州帝国大学医学部精神病学教室（九大フィル所蔵）。

図版⑩　現在の九州大学馬出キャンパス、医学部精神病学教室跡地。現在は外来用第２駐車場として利用されている（筆者撮影）。